

浜松市中区の蛸塚中学校の正門前に、「ジミセン」というコミュニティカフェがある。ここは、持続可能で循環型の街作りをめざす市民活動「トランジションタウン浜松」の拠点であり、定期的にマルシェが開催されたり、時には映画の上映会やコンサートなども開かれて、地域住民の積極的な交流が行われている素敵な場所だ。

松浦孝司さん(65)は、そのトランジションタウン浜松のメンバーのひとり。訪ねると彼は赤ちゃんを抱っこして出迎えてくれた。「お孫さんですか？」と伺うと、「違います。でもここに来る子どもはみんな自分の孫のようなものです」そう言って松浦さんは笑う。聞けば、何かイベントがある時には自ら子守役を買って出て、他のメンバーからは「みんなのじいじ」と呼ばれているそうだ。

「子育て世代は大変ですよ。それでも、若いママさん達が環境を守るための活動とかを一生懸命にしている。そういうのを少しでも応援してあげたいんです。自分が子どもを見てあげれば、ママさん達も気兼ねなくワークショップなどに参加できるしね。」

そう言う松浦さんの宝物は、子守りをしたかわいい孫たちとの記念写真だ。100人以上の孫たちと撮った写真のコレクションを嬉しそうに見せてくれた。



松浦孝司さん1



松浦孝司さん2

松浦さんは、元々はマシニングオペレーターとしての仕事に従事していたそうだ。仕事そのものは楽しかったが、会社と家の往復ばかりの生活には多少の疑問も感じていた。また定年後の生きがいについても漠然とした不安を感じていた。そんな時にトランジション活動をしている仲間と知り合い、「こういう生き方も悪くはないな」と思い、退職後に「第二の人生」としての現在の活動を始めたという。

還暦を過ぎてからの地域活動デビューである。しかし松浦さんにはいささかの躊躇もない。子守りのボランティアだけでなく、面白いと思ったことは何でも挑戦してみるのがモットーだ。今まで自分になかった知識を覚え、新しい経験ができることが面白くて仕方がない。

最近ハマっているのは自然環境の保全と整備。放置された竹林の手入れをしつつ肥料用の竹炭を焼いたり、休耕畑に食べられる森を造る「フォレストガーデンプロジェクト」などにも積極的に関わっている。そのためにチェーンソーの扱いを習う講座に参加したり、「大地の再生」「自然剪定」の技術を学んだりしているそうだ。松浦さんのチャレンジはまだまだ終わらない。



[松浦孝司さん3](#)

最後に、ジミセンに居合わせた松浦さんの仲間達に、彼のことについて尋ねてみた。すると皆が口を揃えて「じいじは年々若返っていくようだ」とのこと。新しいことを学ぼうとする情熱、何かの役に立ちたいと思う使命感、そういう心が心身の健康に大きく関わってくるのであろう。松浦さんのさらなるご活躍に期待したい。

浜松南部地区生きがい特派員 丸山敬